

新課程のカリキュラムと大学入試の動向

～『[データ分析]大学入試 英文法・語法問題 アップグレード UPGRADE』
(三訂版)出版にあたって～

霜 康司

1. 新課程による負担増と英文法

新課程では従来よりも高いレベルの英語力が求められています。たとえば、語彙についてはコミュニケーション英語ⅠⅡⅢで3,000語(うち1,200語は中学既習)を指導することとされています。重要なのは語数が増えたことだけでなく、これまでは2,700語が上限の目安だったのに、3,000語が下限となったことです。また、英文法についてはコミュニケーション英語Ⅰですべての文法項目を登場させることになっています。これまでなら教科書によっては英語Ⅱで取り上げていた項目も、これからは必ずコミュニケーション英語Ⅰである程度取り上げなければならないということです。

これらの変更は、小学校での外国語活動を実施した上に、中学の各学年で英語の履修を3単位から4単位に増やしたことで、高校入学時の英語の習熟度は相当向上することが見込まれるから、というのが文部科学省の見解です。

ところが、実際には以前と比べて高校入学時の英語力が向上しているとは限りません。おまけに、ペアワーク、スピーチなどを通して生徒に英語を話させるのに多くの時間と労力が必要となっていますから、もはや旧来のような英文法の授業は極めて困難に思われます。

2. 必要不可欠な英文法とは

本来、英語を母語としない英語学習者にとって英文法は、非常に有効な学習手段のはずですが、英文法を通してさまざまな言語現象を体系化し整理でき、無限の暗記から逃れ、英文の構造を論理的に分析することができます。ですから、新課程のカリキュラムにおいて、英文法の指導に十分な時間をとれないことに不安を持つ先生が多くおられるのは当然でしょう。内容の大半を英文法に割く英語表現の教科書

が多くの学校で採択されているということが、まさにその不安の表れといえます。これは指導要領にある「文法事項を言語活動と効果的に関連づける」という考え方に基づいたひとつの現実的な対応かと思われれます。しかし、短時間ですべての項目を網羅する必要に迫られたため、教科書以外でも、これまで以上に分厚い英文法の問題集や参考書が学校採用されている例もかなりあるようです。皮肉なことに、指導要領にある「文法の用語や用法等に関する説明は必要最小限」とする新課程のカリキュラムによって、逆に生徒に課される英文法の情報は肥大化したかのようです。

改めて本当に「必要最小限」の英文法の知識とは何なのかをしっかりと見極め、最も効率のよい学習方法を提供することが何より求められています。

3. 頻出問題が繰り返されるセンター試験

まずは大学入試において英文法がどのように扱われているかを分析したいと思います。2014年センター試験で出題された事項は、過去のセンター試験等で既出の事項ばかりでした。2014年第2問Aの10問ともが『アップグレード』に収録されている項目ですし、うち7問が[頻出]マーク、もしくは[センター]マークの付いている項目でした。

不定詞 (53)

接続詞 (40)

前置詞 (39)

関係詞 (38)

時制 (37)

分詞 (36)

助動詞 (32)

仮定法 (28)

比較 (24)

これは過去 25 年のセンター試験第 2 問の分析です。下線は今年出題された項目です。つまり上記の分野は 2 年に 1 度以上出題されてきたし、その多くが今年も出題されたということです。当然新課程になっても引き続き出題されることが予想されるでしょう。もちろん、上記以外の項目(受動態、動名詞など)も出題されていますが、数の上ではかなり少なくなります。出題頻度という観点からは、まず上記の項目を生徒達に習熟させるべきでしょう。

近年のセンター試験で注目すべき変更点は、出題項目ではなく、総語数の増加です。下の数値は誤りの選択肢も入れたセンター試験の総語数です。

2006年	3,500語
2007年	3,900語
2013年	4,250語
2014年	4,200語

ここ数年で 700 語も増えていきますから、長文の問題が一題増えたのと同じことです。もちろん、生徒の情報処理能力が格別上昇したわけではなく、以前のような正答率 30% を切る難問を減らすことで、平均点を維持しているだけです。難問はいらない、という方針がはっきり出ているといえるでしょう。

4. 基本事項を確実に覚えるために

さて、2014 年のセンター試験の正答率を確認しますと、英語の学習は基本事項を何度も繰り返し確認することがいかに重要か思い知らされます。

下の問題を見てください。

My wife wanted to have our son [] dinner for us, but I ordered a pizza instead.

① cook ② cooked ③ cooks ④ to cook

(2014 年 センター試験)

正解は①で、have+O+C(原形の動詞)という基本事項を問う問題ですが、驚くべきはその正答率でした。この文型は全ての高校で教えているはずなのに、本番での正答率はわずか 48% です。センター試験は正答率 50% 以上の問題を全部解ければ 160 点になる試験ですから、こうした基本問題を確実に得点できるかが合否を分けるともいえます。

新課程の慌ただしい中、授業だけで同一項目に繰り返し触れることまで配慮するのは、極めて困難だと思います。しかし、もし学習メニューに繰り返しの確認作業が含まれていないと、このような低い正答率になることを覚悟するべきです。これまでと同様、自習用の教材を提供し、それを小テストなどを通じて再確認させることが、指導の基本となるでしょう。

5. 変わらぬ英文法の重要性和増える会話問題

センター試験以外の大学入試の動向を調べますと、2000 年代前半と比較して、ここ数年の私立大学入試では短文の文法・語法問題はほぼ横ばいで、配点の約 20% となっています。国公立大学では 3 ポイント上昇し約 7.5% 程度となっています。全体としては、大学入試において英文法は重要な比率を占め続けているといえるでしょう。

最近の入試における最も重要な変化と思われるのは、会話問題の増加です。私立大学ではもともと 10% 近くの配点を占めていますが、国公立大学の入試ではここ数年間で配点率が 1.5 倍になり、7% 近くを占めるようになっていきます。熟語的な会話表現はもちろん、否定疑問文に対する答え方などのような会話文ならではの文法事項も数多く出題されています。

新課程においてコミュニケーション能力はさらに重視されていますから、会話問題は今後もますます増えることが予想されます。

6. 大学入試で増えた Discourse Marker

会話問題と同様に、最近の大学入試で最も増えた項目の 1 つは、Discourse Marker です。

however	(131)
in addition	(118)
on the other hand	(101)
for example	(84)
on the contrary	(81)
as a result	(80)
in fact	(57)

ここに挙げている数字は過去 15 年間の出題数ですが、頻出熟語の get along with A (73) と比較し

てみると、いかによく出題されているかがわかるでしょう。これはもちろん、昨今のコミュニケーション能力を重んじる指導と重なる部分といえます。

Discourse Marker の問題は、短文問題よりも長文の空所補充という形で問われることが多いのも特徴です。短文空所補充を出していない大学でも出題されますから、多様化する問題に対応しなければならない項目だともいえるでしょう。

7. 東大入試に見る英文法問題

今度は 2014 年の東京大学の入試問題の第 4 問をご覧ください。(下線部から取り除かなければならない語を一語指摘させる問題です)

... (4) I believe that when circumstances lead men or women to go without this happiness, a very deep need **for** remains unfulfilled, and that this produces dissatisfaction and anxiety the cause of which may remain quite unknown.

この問題では主語 need と述語動詞 remains の間にある不要な前置詞 for を指摘させる問題でしたが、これは 1 行目の that when という箇所がポイントになっています。

that when S' V' ... , S' V'

上のように that 節の中に when 節がある形をすぐに思い浮かべ、カンマの直後に S' V' が来なければいけないと予測している生徒には平易な問題だったはずですが、接続詞の後には SV 関係の構造が来るはずだという基礎的な英文法の知識があれば正解できる、東大らしい問題でした。東大らしいというのは、難解そうに見える事項を含めておいて問題のポイントを錯乱させるようにしてあるからです。注目すべきは多くの生徒が惑わされた最後の関係詞節です。

... dissatisfaction and anxiety the cause of which may remain quite unknown.

(原因がまだわからないままである不満と心配)

この関係詞節では the cause of which という名詞句が、関係詞節中の may remain の主語となっており、which の先行詞は dissatisfaction and anxiety です。複雑な構文ですし、実際この部分を誤りだと思った生徒も数多くいました。けれども、この [名詞+前置詞+関係詞] の構造も『アップグレード』では [頻出] として取り上げています。生徒には難しく見えても、実は入試でも頻出の項目なのです。

今年の大学入試を見る限りにおいて、新課程になっても英文法問題が出題され続けることはまちがいになく、それも標準的な知識の運用力を問うという指導要領に添った出題になると予想されます。これまで以上にコミュニケーション上重要な項目にしぼった指導が望まれるといえるでしょう。

8. 実用的な英文法の指導法

新課程においては、何かと手探りで実験的な試みが行われるでしょうが、だからこそ信頼できる教材が必要です。『アップグレード』改訂にあたってまず心がけたことは、これまで通りの編集方針を貫き、**本当に問われる重要事項に情報を絞る**ということでした。さらに、**最新の入試や英語の情報を敏感に取り入れて、生徒にわかりやすい解説**となるよう心がけました。

具体的には、各章のデータリサーチを更新し、英会話、熟語、語彙などにおいて新傾向の問題を収録しました。また、英文法の解説は初学者でもわかりやすく、かつ見やすくしました。

改訂作業を終えつつある中、当初の目標がほぼ達成できたのではないかと考えています。

ぜひとも先生方にご高覧頂き、多くの生徒さんの一助となれば幸いです。三訂版について先生方の貴重なご意見を頂戴できるのを楽しみにお待ちしております。

(PRODIGY 英語研究所主宰、駿台予備学校講師、翻訳家、国際演劇評論家協会(AICT)会員、劇作家協会会員、著書『システム英単語』(駿台文庫)、『アップグレード英文法・語法問題』(数研出版)他)